

教科書の編纂・発行等教科書制度の変遷に関する調査  
研究：算数（数学）科の教科書の著作者

メタデータ	言語: ja 出版者: 教科書研究センター 公開日: 2016-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長崎, 栄三 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/9935">http://hdl.handle.net/10297/9935</a>

## 第2節 算数(数学)科の教科書の著作者

### 1. 明治初期の著作者

明治初期の教科書は、自由発行、認可制度のもとにあった。この時期は、小中学校とも1872(明治5)年の「学制」から始まり、小学校は1886(明治19)年の「小学校令」以前の約15年間、中学校は同年の「中学校令」以前の約15年間を指す。現在までの研究では、小学校の教科書の全体像については明らかにされているが、中学校の教科書の全体像についてはあまりはっきりしていない。

#### (1) 小学校

明治初期の小学校算術科の教科書については、『日本教科書大系 算数(五)』(以下、『大系』と省略)に詳しい<sup>1)</sup>。この時代の教科書は、主に、筆算、珠算、幾何に分けられ、また、中学校と重複している場合も少なくない。ここでは、『大系』の「算数教科書総目録」(以下、総目録と省略)(9～92頁)の教科書名・著作者名・解説から、明治20年以前に発行されていて(『大系』に挙げられている番号で1～503)、しかも、その後、検定を通った9点(番号:484, 485, 486, 487, 488, 494, 495, 499, 502)を除いた494点について、著作者毎に単独とグループを区別して分類した。すなわち、例えば、「岸俊雄」という単独名で書かれている場合と、「岸俊雄・山田則政」というグループ名で書かれている場合とは別々の著作者とした。以下、本稿では、戦前の著作者の分析において、特に断らない限り単独とグループを区別している。

このようにして明治初期の算術教科書の著作者を分類すると、全部で355名(グループ)となった。このうちで、3点以上の教科書を著した著作者は、30名(グループ)であり、それらの著作者を最初

の教科書の発行年順に挙げると、次のとおりである。なお、( )内は、教科書の点数である。

関口開(5)、花井静(3)、吉田庸徳(4)、弘鴻(3)、土屋智(6)、杉山義利(3)、中條澄清(15)、藤井信暁(3)、松本時敏(4)、山本正至・田沢昌水(3)、平山子徳(3)、小林義則(5)、村垣素行(3)、栗野忠雄(3)、橋爪寛一(5)、加藤義促(3)、高木怡荘(3)、新名重内(3)、藤川春龍(3)、藤井信厚(3)、山田正一(7)、山田昌邦(3)、塩野入安(3)、後藤磯右衛門(3)、西尾吉太郎・林小彌太(3)、水野淵二郎(3)、尾関正求(3)、田中矢徳(3)、内藤文融(3)、大島孝造(3) これらの著作者の教科書を見ると、和洋が混在しているが、若干、洋算(筆算、暗算、幾何)が多いようである。なお、これらの著作者と重複するところもあるが、『大系』に翻刻収録されている代表的な教科書の著作者とその教科書名、発行年を挙げると次のとおりである。

塚本明毅(筆算訓蒙:1869)、吉田庸徳(洋算早学:1872)、佐々木綱親(改正洋算例題:1873)、中村六三郎(小学幾何用法:1873)、師範学校・文部省(小学算術書:1873～76)、岡本則録(上等小学課書幾何初歩:1878)、福田理軒(明治小学塵劫記:1878)、山田昌邦(小学暗算書:1878)、大柿玄九郎(小学必携珠算用法:1879)、尾関正求(数学三千題:1880)、小山健三(小学筆算書:1882)、千葉公胤(初等小学筆算教授書:1882)、中條澄清(初等小学珠算教授書:1883)、山田正一(小学初等課書算学実物教授本:1883)

#### (2) 中学校

明治初期には、中学校の数学科では外国語の教科書が使われていた。それらの著作者は、「外国

教師ニテ教授スル中学教則」(1872(明治5)年8月文部省)によると、算術ではデイビス(Davies, C: 英), エイセリック(仏), リュブセン(Lubsen, H.B: 独), 幾何ではデイビス(英), レジャンドル(Legendre, A.M: 仏), ウィガント(Wiegand, A: 独), 代数ではデイビス(英), ソンネ(Sonnet, H: 仏), リュブセン(独)が挙げられている。

日本語の教科書としては、和算家による和算書と洋学者による外国の教科書の翻訳書や編纂書があった。「中学校及師範学校教科書ニ採用シテ苦シカラサル分」に、1873(明治6)年から1885(明治18)年にかけて発行された41点の数学教科書が挙げられているが<sup>2)</sup>, この中の和算書の著作者には、千葉雄七(算法新書:1873), 神田理軒(明治小学塵劫記:1878)などがおり、翻訳書の著作者には、神津道太郎(筆算摘要:1875), 柴田清亮(幾何学:1879), 石川彝(代数学:1877), 宮川保全(三角新論:1876)などがいた。また、『再版数学三千題』(1882)で有名な尾関正求も見られる。なお、小倉金之助は、この時代の著作者として、ロビンソン(Robinson, H.N.), チャンバース(Chambers, W & R), トドハンター(Todhunter, I)の教科書をもとに『代数教科書』(1882), 『算術教科書』(1884)を編集した田中矢徳を評価している<sup>3)</sup>。

## 2. 明治検定期の著作者

明治初年の自由発行、認可期を経て、教科書は検定制度になった。この時期は、小学校は1886(明治19)年の「小学校令」から1903(明治36)年の「小学校令」改正以前の約18年間であり、中学校は1889(明治19)年の「中学校令」から1943(昭和18)年「中学校令」改正以前の約55年間である。現在までの研究では、認可期と同様に、小学校の教科書については明らかにされているが、中学校の教科書についてはあまりはっきりしていない。

### (1) 小学校

小学校の算術科教科書は、1886(明治19)年から1903(明治36)年までは検定制度であった。この間に検定を通った算術教科書は、『検定済教科用図書表』(以下、『図書表』)の解題によると218点である<sup>4)</sup>。そこで、筆者は、この『図書表』と『大系』の「総目録」を比較対照してみた。その結果、『大系』の総目録では、算術科の「簿記」(13点)が含まれておらず、また、改訂版や児童用・教師用が1点の中に含まれており、そのため、『大系』全体で検定教科書は、135点になっている。さらに、『大系』の「総目録」には、『図書表』に含まれている、次の4点に関する記述が欠けていることが分かった。

上野清『教授改良 算術三千題』

明治22年2月9日検定

長沢亀之助『小学算術教科書 尋常科教員用』

明治34年1月18日検定

文学社編輯所『小学新算術 尋常科教員用』

明治34年12月27日検定

文学社編輯所『高等小学国民新算術 教師用』

明治33年2月3日検定

ここでは、これらを含めて、著作者数を数えると、検定期の著作者数は96名(グループ)となり、このうちで、『大系』の「総目録」をもとに2点以上の教科書を著した著作者は、30名(グループ)であり、それらを最初の教科書の発行年順に挙げると、次のとおりである。なお、( )内は、教科書の点数である。

中條澄清(4), 佐久間文太郎(4), 竹貫登代多(7), 岡村増太郎(4), 尾関正求(2), 青野尹階(2), 辻敬之・寛昇三(2), 曾我部信雄(2), 古川凹(2), 郡正光(3), 樺正董(2), 渡辺政吉(2), 学海指針社(4), 小野友五郎(2), 石川富三郎(2), 森孫一郎(2), 田中矢徳・金沢長吉(2), 鈴木直三郎・竹内左一(2), 稲垣作太郎(2), 長沢

亀之助(3), 文学社編輯所(7), 中山民生(2), 金港堂(2), 高浦丈雄(2), 金沢長吉(2), 千葉県教育会(2), 堀越源次郎・中島吉太郎(2)

この時期には、ほとんどの教科書が洋算になっている。なお、著作者として、個人や複数の実名ではなく、会社名や教育会名が出てきている。小学校の算術科については出版社や研究会などの集団で教科書を作ることが始まったようである。なお、これらの著作者と重複するところもあるが、『大系』に翻刻収録されている代表的な教科書の著作者とその教科書名、発行年を示すと次のとおりである。

鶴橋国太郎(珠算初歩:1886), 中條澄清(小学尋常科筆算書:1887), 竹貫登代多(尋常小学筆算教科書:1893), 学海指針社(小学算術高等科:1900), 金港堂(尋常算術教科書:1901)

## (2) 中学校

中学校の数学科教科書は、1886(明治19)年から1943(昭和18)年までは検定制度であった。中学校数学科の検定期の教科書発行の全体像はこれまでに明らかにされていないので、まず、教科書発行・検定の状況をまとめておく。この時期に検定を通った数学科教科書を、筆者が、『検定済教科用図書表』<sup>5)</sup>によって調べた結果をまとめると、資料3-1のとおりである。

1886年から1944年までの59年間に検定を通った中学校数学科教科書は、すべてで855点・1214冊であった。中学校教科書は、算術、代数、幾何、平面幾何、立体幾何、三角法、平面三角法、数学、算術代数、幾何三角法、数表などに分かれていた。この中では、算術、代数、平面幾何が多く認可されていた。なお、資料3-1には、中学校と同様に当時の中等教育機関であった高等女学校、実業学校の教科書についてもまとめてある。

この時期に、中学校(1887~1944)・高等女学校

(1900~1944)・実業学校(1933~1944)の教科書で検定を通った著作者を、上と同様に『検定済教科用図書表』からまとめると、資料3-2のとおりである。中学校・高等女学校・実業学校の全体では、58年間の数学科教科書の著作者は203名(グループ)である<sup>6)</sup>。

中学校の教科書で検定を通った著作者は約150名(グループ)である。そのうち、10点以上の教科書が検定で認可された著作者23名(グループ)を、その検定を通った時期の順に挙げると次のとおりである。( )内は、著作者の主な職業である<sup>7)</sup>。

明治 : 田中矢徳(攻玉社中学校), 上野清(数理書院)

明治~大正: 長沢亀之助(専修大学), 三輪桓一郎(京都帝国大学教授), 樺正薫(東京実践女学校), 沢田吾一(東京高等商業学校教授), 高橋豊夫(広島高等師範学校教授), 遠藤又蔵(不明), 宮本藤吉(不明), 三守守(東京高等工業学校教授), 寺尾寿(東京帝国大学教授)・吉田好九郎(学習院教授)

明治~昭和: 林鶴一(東北帝国大学教授), 国枝元治(東京文理科大学教授), 高木貞治(東京帝国大学教授)

大正~昭和: 阿部八代太郎(東京高等師範学校教授), 広島高等師範学校附属中学校数学研究会, 中川銚吉(東京帝国大学教授), 竹内端三(東京帝国大学教授), 園正造(京都帝国大学教授), 寺尾寿(東京帝国大学教授)・藤野了祐(早稲田大学), 掛谷宗一(東京文理科大学教授), 松本敏三(京都大学)

昭和 : 米山国蔵(九州帝国大学教授)

ほとんどの著作者が、大学の著名な数学者であ

り、しかも、単名（または2～3名）であり、グループとしての著作者は少ない。なお、日本中等教育数学会（現在の日本数学教育学会）の会長を歴任した人も数名いる。

高等女学校の教科書の著作者で、検定が開始された1900(明治33)年以降1944(昭和19)年までの間に検定を通ったのは約80名(グループ)おり、そのうち、10点以上の教科書が検定で認可された著作者13名(個別では14名)を、中学校と同様に挙げると次のとおりである。

明治～大正：伊藤豊十(不明)、森岩太郎(東京女子高等師範学校)、近藤耕蔵(不明)

明治～昭和：小林盈・稲垣作太郎(東京市立第三高等女学校)、林鶴一(東北帝国大学教授)、高木貞治(東京帝国大学教授)

大正～昭和：阿部八代太郎(東京高等師範学校教授)、広島高等師範学校附属中学校数学研究会、中川銓吉(東京帝国大学教授)、竹内端三(東京帝国大学教授)、園正造(京都帝国大学教授)、帝国書院編集部、渡辺孫一郎(東京工業大学教授)

多くの著作者が中学校の著作者と重なっている。

実業学校の教科書の著作者で、検定が開始された1933(昭和8)年以降1943(昭和18)年までの間に検定を通ったのは約40名おり、そのうち、10点以上の教科書が検定で認可された著作者4名(グループ)を、挙げると次のとおりである。林鶴一、阿部八代太郎、広島高等師範学校附属中学校数学研究会、竹内端三。

1941(昭和16)・1942(昭和17)年の2年間は、物資不足のため、文部省が検定教科書のうちから各学科5種以内を選定するという「5種選定」が実施された。中学校の選定教科書は、算術代数・数

学・代数・幾何・幾何三角など19点で、その著作者は次のとおりである。竹内端三、阿部八代太郎、掛谷宗一、東京高等師範学校附属中学校数学研究会、広島高等師範学校附属中学校数学研究会。高等女学校の選定教科書は14点で、著作者は渡辺孫一郎、佐藤良一郎、国枝元治・中沢伊興吉、中川銓吉、園正造であった。なお、実業学校はその特殊性から11点が選定され、その著作者は9名(グループ)で、松本敏三、岡田良知・森本清吾、鍋島信太郎、岩付寅之助、大阪工業数学研究会、高木貞治、竹内端三(昭和17年だけ：工業教育振興会、中川銓吉)であった。これらの著作者による教科書は、当時よく使われていた教科書を反映していたものと思われる。

1943(昭和18)年には、検定教科書の著作者は中等学校教科書株式会社と実業学校教科書株式会社の2社だけになった。実際の著作者は、中学校・実業学校は、杉村欣次郎(東京文理大学教授：数学)、田中良運(東京高等師範学校附属中学校教諭)、和田義信(文部省図書監修官)、島田茂(東京高等師範学校附属中学校教諭)、黒田孝郎(東京物理学校教授)であり、高等女学校用の著作者は、清水辰次郎(大阪帝国大学教授：数学)、前田光(大阪府立大手前高等女学校嘱託)、石谷茂(大阪帝国大学副手)らであった。なお、中学校・高等女学校用とも、1種検定教科書には、5年制用と4年制用とがある。また、このときの師範学校の教科書の著作者は戸田清(広島高等師範学校教授)である。この時期から中学校の教科書の著作者は、一人の大学の数学者の手から離れ、大学の数学者と学校の数学教師の集団となるのが当たり前となってきた<sup>8)</sup>。

### 3. 国定期の著作者

教科書は検定期を経て、国定期に入る。この時期は、小学校は1903(明治36)年の「小学校令」改

正から1950(昭和25)年の戦後検定教科書発行以前の約48年間であるが、中学校は1943(昭和18)年の「中学校令」改正から1950(昭和25)年の戦後検定教科書発行以前の約7年間だけである。

### (1) 小学校

国定第1期(1905～), すなわち、『尋常小学算術書』(いわゆる黒表紙教師用教科書)は、飯島正之助(第一高等学校教授), 中村兎茂吉(文部省図書監修官), 川上瀧夫(文部省図書課属)によって編集された<sup>9)</sup>。第2期(1911～)・第3期(1918～)およびメートル法改訂に合わせた第4期(1925～)の編集者については、不明である。

国定第5期(1935～), すなわち、『尋常小学算術』(緑表紙教科書)は、塩野直道(文部省図書監修官)を主任として、津田一夫(文部省嘱託), 安東寿郎(東京高等師範学校教授), 柿崎兵部(女子学習院教授), 高木左加枝(東京高等師範学校訓導)によって編集された<sup>10)</sup>。

国定第6期(1941～), すなわち、『カズノホン』・『初等科算数』(青表紙教科書)は、前田隆一(文部省図書監修官), 森規矩男(文部省図書監修官補), 安東寿郎(前東京高等師範学校教授), 池松良雄(東京都視学官)によって編集された<sup>11)</sup>。ただし前田は、『カズノホン』の編集が終わったあとに高等学校担当に移り、その後は丸山俊朗(文部省図書監修官)が務めた。『高等科算数』は和田義信(文部省図書監修官)の作と言われている<sup>12)</sup>。戦後の墨塗り教科書(1945年), 暫定教科書(1946年)は、この教科書を底本として削除・作成されたものである。

国定第7期(1947～), すなわち、1947年(昭和22)年の文部省著作算数教科書『さんすう』、『算数』は、C I Eに認可されたもので、主な著作者は、文部省の和田義信, 丸山俊朗らと思われる。その後、1949(昭和24)年に、いわゆる単元学習の

モデル教科書と言われた『小学生のさんすう 第四学年用』(3冊)が発行された。その著作者は、和田義信(文部事務官), 青池実(文部事務官), 石田貞一, 渡邊一雄, 田林親康, 村田好道, 山本喜治, 小林利男, 小森理守, 白石三郎, 森規矩男である。

### (2) 中学校

中学校では1944(昭和19)年に国定教科書となったが、それは前年の検定教科書を修正したものである。修正した人物は定かではないが、前年の検定教科書を作成した杉村欣次郎(東京文理大学教授), 田中良運(東京高等師範学校附属中学校教諭), 和田義信(文部省図書監修官), 及び、丸山俊朗(文部省図書監修官)と思われる。

終戦後の1945(昭和20)年の墨塗り教科書及び1946(昭和21)年の暫定教科書は、1943(昭和18)年の検定教科書と1944(昭和19)年の国定教科書を底本にして削除・作成されたものである。この削除には、東京文理科大学・高等師範学校附属中学校関係者の佐藤良一郎, 宮崎勝式が加わっている<sup>13)</sup>。最終的には、文部省の和田義信, 丸山俊朗らが行ったと思われる。

1947(昭和22)年度から新制中学校が発足し、1947年の文部省著作でC I Eに認可された『中等数学』が使われた。主な著作者は、文部省の和田義信, 丸山俊朗らと思われる。

1949(昭和24)年には文部省から『中学生の数学』(いわゆる、単元学習の教科書)の1学年用が2冊発行された。この教科書は、「企画」は和田義信(文部省), 「原案」は飛岡正治, 川口廷, 館嶋, 高橋運宜, 土屋正夫, 鶴賀伊奈夫, 山内文逸, 松田道雄, 松岡元久, 小西勇雄, 佐藤長治郎, 「編集」は和田義信(文部省), 川口廷, 中島健三(文部省), 松岡元久, 小西勇雄, 小松直行, 島田茂(文部省)であった。結局、これら2

種の教科書は、その後民間から発行された検定教科書とともに1952(昭和27)年度まで使われた。

### (3) 主な著作者

#### 1) 小学校用

国定第1期の編集を担当したのは、飯島正之助であり、飯島は、東京大学を出て第一高等学校教授となっていた。文部省では、図書監修官の中村兔茂吉がその任に当たった。中村については、理科の国定教科書の編集で有名である。ここでは、国定第5期以降の主な著作者についてまとめておくことにする。

#### ① 塩野直道

1898(明治31)年に島根県で生まれ、1922(大正11)年に東京帝国大学理学部物理学科卒業後、松本高等学校教授を経て、1925(大正14)年に文部省図書監修官に就任した。そして、昭和初年に『尋常小学算術』(いわゆる緑表紙教科書)を中心となって編纂した。ここでは「数理思想の開発」が特徴的である。その後、1942(昭和17)年には、文部省図書局第二編集課長に就任し、中学校数学科の『数学 第一類・第二類』、理科『物象』などの編集にも関係した。なお、要目に列挙されている内容は、学習したあとのカスのようなものであり、その精神こそ学ぶべきであるとした「要目カス論」は有名である。その後、1945(昭和20)年に金沢高等師範学校長に就任し、そこで終戦を迎えた。戦後、公職追放になり、その間に書いた『数学教育論』(啓林館、1947)は戦後初めてのまとまった数学教育論として有名である。復帰後は、啓林館に入社し、小中学校の算数・数学の教科書編集に力を注いだ。1969(昭和44)年に死去。

【主な著書】数学教育論(啓林館、1947)、算数・数学教育論(啓林館、1961)、数学教育革新のために(啓林館、1964) 【参考】随流導流(啓林館、

1982)、日本数学教育学会誌(以下、日数教会誌と省略)第51巻7号

#### ② 前田隆一

1907(明治40)年に奈良県で生まれ、1931(昭和6)年に京都帝国大学理学部数学科卒業後、京都帝国大学副手、第八高等学校講師・教授を経て、1940(昭和15)年に文部省図書監修官に就任した。その後、中学校教授要目『数学 第一類・第二類』の作成に参加したあと、『カズノホン』の編集に取り組んだ。そこでは「直覚的」な作業を重視した。その後、高等学校規程の改定にかかわり、督学官、科学局教学官、専門教育局教学官を経て、海軍司政官となった。戦後、1949(昭和24)年に吉野書房を創設し、『新算数教育講座』(1961)など数学教育関係の書籍を発行し、さらに『算数と数学』(教育総合研究所)の発行にかかわり、大阪書籍に入り、小中学校の算数・数学の教科書編集に力を注ぎ、1952(昭和27)年には、大阪書籍の社長に就任した。なお、戦前から図形教育に強い関心を持ち発言を続けてきたが、それらをまとめた『算数教育論』(金子書房、1979)は図形教育研究の戦後の原点ともなっている。現在は、大阪書籍相談役となっている。

【主な著書】算数教育論(金子書房、1979)、全人的人間像の科学論(大阪書籍、1983)、小・中学校を一貫する初等図形教育への提言(東洋館出版社、1995) 【参考】数学教育の回顧と展望(国立教育研究所、1989)

#### ③ 丸山俊朗

1937(昭和12)年に東京文理科大学数学科卒業後、東京高等師範学校附属中学校教諭を経て、1941(昭和16)年に文部省図書監修官に就任した。前田隆一の後を受けて、『初等科算数』の編集を行った。戦中戦後の算数・数学教育を和田義信とともに

に文部省で支えたが、1947(昭和22)年に死去。

④森規矩男

1903(明治36)年(?)に宮崎県で生まれ、宮崎師範学校卒業後、宮崎師範学校附属小学校、田園調布小学校を経て、1940(昭和15)年に文部省に入り、1941(昭和16)年に文部省図書監修官補となり、『カズノホン』、『初等科算数』の編集に加わった。1945(昭和20)年に塩野直道とともに金沢高等師範学校に移り、終戦を迎えた。戦後は、忍岡高等学校教諭を経て、大阪書籍に移り、前田隆一らとともに算数・数学の教科書の編集を行った。1968(昭和43)年に死去。

【参考】算数と数学(総合教育研究所、1968年4月号、1968年8月号)

2)中学校用

中学校では、先に述べたように、国定期間は短かった。そこで、その間の全般にかかわった和田義信についてまとめておく。

①和田義信

1912(明治45)年に富山県で生まれ、1937(昭和12)年に東京文理科大学卒業、東京高等師範学校助手・教授を経て、1943(昭和18)年に文部省図書監修官に就く。中学校の1種検定教科書『数学 第一類・第二類』の作成に加わった後、その教科書の中学校国定教科書『数学 第一類・第二類』、戦後の文部省著作教科書『中等数学』、『中学生の数学』の編集にかかわった。戦中・戦後の文部省での算数・数学の国定教科書の作成、学習指導要領の作成等の教育行政を一手に引き受けていた。戦後の算数教育における意味指導の強調の先鞭をつけたと言われている。1953(昭和28)年に東京教育大学助教授に移り、その後、同大学教授となり、日本の数学教育の指導的役割を果たし、1976(昭

和51)年に定年退官。1995(平成8)年に死去。

【主な著作】和田義信著作・講演集(全8巻)(東洋館出版社、1997予定) 【参考】日数教会誌第78巻3号

4. 戦後の検定期の著作者

戦後の検定期は、1950(昭和25)年から始まる。しかしながら戦後の検定期は、戦前の検定期と教科書作成の形態が全く異なっていた。戦前は、これまでに見てきたように個人の著作者が教科書を著すという場合がほとんどであったが、戦後は、民間の教科書会社によって構成された学者や数学教育関係者らからなる著作者グループ(編集者、監修者、著作者、執筆者等)が教科書を著し始めたのである。

そこで、教科書の著作者を把握するために、まず、戦後に小学校算数科、中学校数学科の検定教科書を発行したことがある教科書会社を示すと、小学校教科書16社、中学校教科書23社で、次のとおりである<sup>14)</sup>。数字は、小中学校別の発行年(西暦19XX年)。

日本書籍	:小50~70年	中51~71年
東京書籍	:小50~現在	中51~現在
大阪書籍	:小50~現在	中52~現在
大日本図書	:小51~現在	中50~現在
中教出版	:小50~70年	中50~65年
教育図書	:-----	中51~59年
実教出版	:-----	中51, 56~65年
学校図書	:小50~現在	中51~現在
二葉図書	:小51~61年	中52~61年
三省堂	:-----	中51~65年
教育出版	:小55~現在	中52~現在
富山房	:-----	中50~60年
北陸教育書籍	:小55年	-----
光村図書	:-----	中56~61年
富士教科書	:小50~59年	-----

国民図書：小51年	中52～54年
広島図書：小51～53年	-----
青雲社：-----	中51～58年
日本書院：-----	中56～68年
啓林館：小52～現在	中54～現在
績文堂出版：小53～55年	中52～64年
学芸出版社：-----	中59～61年
日本文教出版：小61～65年	中62～68年
学研書籍：-----	中62～65年
暁教育図書：-----	中62年
正進社：-----	中62～65年
義式算数研究会：小68～79年	-----

次に、これらの教科書の中から代表的な教科書を選ぶために、戦後の学習指導要領の改訂に合わせて、算数・数学科の教科書の発行時期を「戦後教科書時期区分」によって次の6期に分けた。数字は各期の最初の年(西暦19XX年)。

- I期：小46年～ 中46年～
- II期：小53年～ 中53年～
- III期：小61年～ 中62年～
- IV期：小71年～ 中72年～
- V期：小80年～ 中81年～
- VI期：小92年～ 中93年～

それぞれの期において、最初の時期に発行された教科書の中から、発行部数が多い順に6点の教科書を選択した。6点としたのは、現在の教科書発行社数に合わせたためである。その結果、小中学校とも、東京書籍、大阪書籍、大日本図書、学校図書、教育出版、啓林館、二葉の7社が選択された。ただし、二葉は最初の2期だけであり、教育出版はIII期以降だけである。

これらの教科書は、すべて、著作者グループによって書かれているが、それらの代表的な著作者を、「代表者」、「監修者」、「顧問」という肩書が記されている著作者とすると、次のとおりである。ただし、教科書によっては、必ずしも代表的

な著作者を明記しないことがしばしばあるが、傾向の一端を見ることができるので挙げておく。なお、( )内は期。

- 東京書籍：小学校 彌永昌吉(I～IV)
- 三村征雄(I～IV)
- 小平邦彦(V)
- 古屋茂(VVI)
- 前原昭二(VI)
- 中島健三(VI)
- 杉山吉茂(VI)
- 中学校 彌永昌吉(I～III)
- 三村征雄(I～III)
- 小平邦彦(VVI)
- 前原昭二(VI)
- 藤田宏(VI)
- 大阪書籍：小学校 森規矩男(II)
- 前田隆一(II VI)
- 高橋睦男(VI)
- 古賀昇一(VI)
- 中学校 上林彌四郎(I)
- 浅野啓三(II)
- 小松醇郎(II)
- 前田隆一(VI)
- 高橋睦男(VI)
- 古賀昇一(VI)
- 大日本図書：小学校 末綱恕一(I)
- 中学校 佐藤良一郎(I II)
- 学校図書：小学校 功力金二郎(III)
- 吉田洋一(III)
- 辻正次(III)
- 戸田清(IIIIV)
- 田島一郎(IV)
- 川口延(IIIIV)
- 中学校 吉田洋一(I)
- 辻正次(I)
- 二葉図書：小学校 鍋島信太郎(I)

中学校 丸山儀四郎(Ⅱ)  
 教育出版：小学校 河口商次(ⅢⅣ)  
 吉田耕作(Ⅳ)  
 原弘道(Ⅳ)  
 宇喜多義昌(Ⅴ)  
 茂木勇(ⅤⅥ)  
 片桐重男(Ⅵ)  
 中学校 河口商次(Ⅳ)  
 吉田耕作(Ⅳ)  
 原弘道(Ⅳ)  
 宇喜多義昌(Ⅴ)  
 茂木勇(ⅤⅥ)  
 片桐重男(Ⅵ)  
 澤田利夫(Ⅵ)  
 啓林館： 小学校 中村幸四郎(Ⅰ)  
 塩野直道(Ⅱ)  
 中学校 塩野直道(Ⅰ～Ⅲ)  
 正田建二郎(Ⅰ～Ⅳ)  
 橋本純次(Ⅳ)  
 栗田稔(Ⅳ)

これら34名のうち3分の2は著名な数学者である。ここでは、このような代表的な著作者を含めたすべての著作者を対象として分析する。なお本

稿では、著作者とは教科書の最後の頁に明記されている人々だけを指す。

なお、全著作者の職種を、小／中学校別に、次のようにして1つに特定することにした。

1. 大学教員・数学教育学者
2. 大学教員・数学者
3. 大学教員・その他
4. 国立小／中学校教員（国立小／中から公立小／中教員や大学教員になった人も含む）
5. 公立小／中学校教員（公立小／中から私立小／中教員や研究所教員になった人も含む）
6. 私立小／中学校教員
7. その他（高校教員，その他）

そして、原則として教科書の著作者になったときの職種を優先した。例えば、国立小学校教員のときに著作者となり、その後、公立学校長に異動したあとも著作者となっていた人は、本稿の分類上では、最初の職種の国立小学校教員とした。

#### (1) 著作者の全体的な特徴

小学校・中学校の算数科・数学科の教科書の著作者を期数別・職種別にまとめると、表1のとおりである。なお、期数とは、6期のうち何期著作

表1 小学校・中学校の算数科・数学科の教科書の期数別・職種別の著作者数

職 種	小学校算数科の著作者数							中学校数学科の著作者数								
	1期	2期	3期	4期	5期	6期	合 計	1期	2期	3期	4期	5期	6期	合 計		
1. 大学・数学教育学者	54	21	16	2	1		94	28%	52	20	12	3	2	1	90	28%
2. 大学・数学者	22	19	8	5	2		56	16%	41	20	7	6	4		78	25%
3. 大学・その他	5						5	1%	1						1	0%
4. 国立小／中学校教員	29	18	8	4	5		64	19%	22	10	5		7	2	46	14%
5. 公立小／中学校教員	58	21	10	1	1		91	28%	31	8	4		1		44	14%
6. 私立小／中学校教員	4	4	6	1			15	4%	5	2	2				9	3%
7. その他	6	5	3		1		15	4%	36	6	5	1	2		50	16%
合計 名	178	88	51	13	10	0	340名		188	66	35	10	16	3	318名	
合計 %	52	26	15	4	3		100%		59	21	11	3	5	1	100%	

者となったかを表したものである。

小学校算数科の教科書の著者は、全員では340名に上るが、3期以上は22%であり、6期のすべてで著者となった人はなく、5期著者となった人が10名いる。一方、1期だけの著者が5割に達している。なお、これらの中の半数、つまり全体の4分の1がVI期だけの著者である。職種別に見ると、大学・数学教育学者28%、公立小学校教員28%、国立小学校教員19%、大学・数学者16%、私立小学校教員4%となっている。小学校の教員が約半数を占めている。

中学校数学科の教科書の著者は、全員では318名に上るが、3期以上は20%であり、6期のすべてで著者となった人は3名であり、5期著者となった人が16名いる。一方、1期だけの著者が6割弱であり、これらの中の半数、つまり、全体の4分の1がVI期だけの著者である。職種別に見ると、大学・数学教育学者28%、大学・数学者25%、国立小学校教員14%、公立中学校教員14%、私立中学校教員3%となっている。大学教員の割合が過半数を占めている。なお、その他が50名と多いのは、大阪書籍の第I期では23名の著者に職種がなく、しかも1期だけであるからである。

小中学校とも3期以上著者であった人は約20%であり、平成に入って著者に世代交替があったと思われる。職種別に見ると、大学関係では中学校で数学者の割合が高く、教員関係では小学校では公立が、中学校では国立の教員の割合が高い。

次に、6期それぞれの期の特徴をつかむために、期別に職種毎に著者をまとめると、表2のとおりである。

小学校算数科の教科書の延べ著者数は、609名である。著者の数は、最近になればなるほど増えており、I期からVI期にかけて50名、61名、100名、117名、129名、152名となっており、最近では1社平均25名となっている。職種別に見ると、大学・数学教育学者26%、公立小学校教員23%、国立小学校教員21%、大学・数学者19%、私立小学校教員6%となっている。最近の著者数の増加は、大学・数学教育学者と公立小学校教員によっている。

中学校数学科の教科書の延べ著者数は569名である。著者の数は、最近急に増えており、I期からVI期にかけて71名、57名、73名、96名、121名、151名となり、最近では1社平均25名となっている。職種別に見ると、大学・数学教育学者28%、大学・数学者26%、国立中学校教員18%、公立中学

表2 小学校・中学校の算数科・数学科の教科書の各期毎の職種別の延べ著者数

職 種	小学校算数科の延べ著者数								中学校数学科の延べ著者数							
	I 期	II 期	III 期	IV 期	V 期	VI 期	合 計	I 期	II 期	III 期	IV 期	V 期	VI 期	合 計		
1. 大学・数学教育学者	4	4	18	31	40	60	157	26%	5	5	18	26	39	64	157	28%
2. 大学・数学者	10	13	19	24	25	23	114	19%	16	21	21	29	29	32	148	26%
3. 大学・その他	3		1			1	5	1%						1	1	0%
4. 国立小学校教員	12	19	24	24	26	25	130	21%	12	15	11	17	23	27	105	18%
5. 公立小学校教員	8	15	24	25	31	36	139	23%	6	4	8	12	17	19	66	12%
6. 私立小学校教員	9	3	5	7	5	5	34	6%		1	4	3	4	3	15	3%
7. その他	4	7	9	6	2	2	30	5%	31	16	11	9	9	5	77	14%
合計 名	50	61	100	117	129	152	609名		71	57	73	96	121	151	569名	
合計 %	8	10	16	19	21	25	100%		12	10	11	16	20	25	100%	

校教員12%, 私立中学校教員3%となっている。

小中学校とも、著作者数が増加しているが、それは、大学・数学教育学者の増加によるところが大きい。これは、教員養成大学の専門性が確立されつつあることの証左であろう。なお、小学校では公立小教員、中学校では公立中教員、国立中教員も増えているが、いずれもで、私立小中学校だけは増えていない。

## (2) 著作者の分布状況

小学校・中学校の算数科・数学科の教科書の著作者の地域別の分布状況を見るために、大学・数学教育学、大学・数学、国立大附属小/中学校、私立小/中学校については、その学校名別に、公立小/中学校については、都道府県別に教師数をまとめた。学校数・都道府県数、および、全体の著作者数の1%以上すなわち小中学校とも4名以上の学校名、都道府県名をあげると、次のとおりである。なお、学校名は現在に統一してある。

[ ]内は学校数・都道府県数の合計、( )内は著作者数。

小学校の算数科教科書の著作者の分布状況は、次のとおりである。

大学・数学教育学者 [45大学] 東学大(9), 広大大(8), 横国大(4), 香大(4), 福教大(4)

大学・数学者 [32大学] 東大(8), 京大(5), 神戸大(4)

国立大附属小学校 [11校] 東学大(23), 筑大(10), 広大(9), 大教大(5), 奈女大(5), お茶大(4)

私立小学校 [6校] 成城学園初等学校(5), 学習院初等科(4)

公立小学校 [14都道府県] 東京(61), 神奈川(6), 大阪(6), 北海道(4)

中学校の数学科の教科書の著作者の分布状況は、次のとおりである。

大学・数学教育学者 [40大学] 広大大(6), 東学大(5), 香大(4), 福教大(4)

大学・数学者 [38大学] 東大(7), 筑大(6), 阪大(5), 大阪市立大(5), 京大(4), 東理大(4)

国立大附属中学校 [9校] 筑大(17), 東学大(11), 大教大(4), 広大大(4)

私立中学校 [7校] (4名以上なし)

公立中学校 [7都道府県] 東京(32), 北海道(4)

小中学校の著作者の分布は、同じ傾向にあり、大学・数学教育学者は、教員養成大学の数学教育学者であり、しかも、全国に散らばっており、大学・数学者は、国立大学(旧帝国大学)理学部の数学者が多く、やはり、全国的に散らばっているが、しかし、教諭は、国公立とも、東京地区が圧倒的に多い。ただし、国立大附属小中学校では、広島、大阪、奈良も多い。

## (3) 著作者と学習指導要領

教科書の改訂は、学習指導要領の改訂に合わせて行われる。そこで、教科書の著作者と学習指導要領関係委員(教材等調査研究会小/中学校算数・数学小委員会委員、小/中学校指導書算数編・数学編作成協力者など。ただし、文部省本庁関係者は除く)の関係を見ることにする。ただし、教科書については、I期からVI期としたが、それに合わせると、学習指導要領関係委員名が公になっているのは、II期からVI期までであるので、それらの期間で比較対照する。

小学校の算数科教科書の著作者340名中、学習指導要領関係委員となっているのは、数学教育学者17名、教育学者1名、国立大附属小学校教諭12名、公立小学校教諭12名、私立小学校教諭3名の合計45名である。

中学校の数学科教科書の著作者318名中、学習指導要領関係委員となっているのは、数学教育学者17名、数学者5名、国立大附属中学校教諭9名、

表3 小学校・中学校の算数科・数学科の学習指導要領関係委員の教科書著作者数

学習指導要領 関係者	小学校の委員数					中学校の委員数				
	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	Ⅵ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	Ⅵ期
全委員数	21名	19名	17名	16名	13名	24名	31名	21名	16名	13名
著作者経験委員数	10名	10名	10名	12名	7名	7名	10名	11名	11名	10名
当期著作者委員数	4名	6名	6名	8名	6名	3名	4名	5名	10名	9名
%	19%	32%	35%	50%	46%	13%	13%	24%	63%	69%

公立小学校教諭7名、私立中学校教諭1名、公立小学校教諭1名、高校教諭4名、の合計44名である。

これらの各期毎の学習指導要領関係委員について、全委員数、著作者経験委員数（いずれかの時期に教科書著作者となった人数）、および、当期著作者委員数（改訂時期のすぐあとに教科書著作者となった人数）をまとめると、表3のとおりである。

小中学校とも傾向は同じで、学習指導要領関係委員数は、この5期の間で約半数に減少しているが、教科書著作者経験委員数はほとんど変わらず、相対的に増加している。さらに、当期著作者委員数も増加傾向で、最近では小学校は50%、中学校では70%に達している。

#### (4) 教科書の主な著作者

##### 1) 小学校用

小学校の算数科教科書の著作者は340名であるが、3期以上著作者となった人々74名をまとめると、資料3-3のとおりである。

これらのうち3期以上著作者となった数人の特徴をあげると次のとおりである。なお、小学校の著作者の中で大学教員の多くは、中学校の著作者も兼ねており、それらの著作者については、教科書会社名のあとに「小中学校」と記してある。

##### ① 末綱如一

（数学者：小学校 大日本図書：Ⅰ期～Ⅲ期）

1898(明治31)年に大分県で生まれ、1922(大正

11)年に東京大学卒業後、九州大学講師、助教授を経て、1924(大正13)年東京大学助教授、教授を経て、1959(昭和34)年に定年退官。1958(昭和33)年からは統計数理研究所長も併任し、その後、専任となり、1970(昭和45)年現職で死去。数学者として、哲学・歴史的立場から数学教育に示唆を行った。

【主な著作】数学と数学史(弘文堂、1944) 【参考】日本の数学100年史・下(岩波、1984)

##### ② 中村幸四郎

（数学者：啓林館 小中学校 Ⅰ期～Ⅳ期、大阪書籍 中学校 Ⅰ期）

1901(明治34)年に東京府で生まれ、1926(大正15)年に東京大学卒業、その後、東京高等師範学校、東京文理科大学、武蔵高等学校等を経て、1949(昭和24)年に大阪大学に勤務し、その後、関西学院大学、兵庫医科大学の設立にも尽力した。数学者として著名で、特に、数学史の日本の第一人者であり、ユークリッドの『原論』の日本語への翻訳を行った。また、数学教育においても、教科書の編集に携わっただけではなく、兵庫県数学教育会長を長年にわたって務めるなど活躍した。

【主な著作】ユークリッド原論(共訳・共立出版、1971)、ギリシア数学の始源(玉川大学、1978)、ユークリッド(玉川大学、1978) 【参考】日本数学教育学会(以下、日数教と省略)会誌第69巻1号

##### ③ 彌永昌吉

（数学者：小中学校 東京書籍：Ⅰ期～Ⅳ期）

1906(明治39)年に東京府で生まれ、1929(昭和4)年に東京大学卒業後、東京大学大学院、ドイツ・フランス留学後、1935(昭和10)年東京大学助教授、教授を経て、1967(昭和42)年に定年退官。その後、10年間学習院大学教授を勤めた。戦前から、数学者として高名なだけでなく、数学教育にも関心を持ち続けており、国際数学教育委員会(ICMI)の会長も務めた。1943(昭和18)年の1種検定教科書『数学 第一類・第二類』の発行に際しての塩野直道との往復書簡(岩波『科学』第13巻第9号)や戦後の単元学習への「てんぷら単元」批判など、数学の系統性の立場から数学教育への発言が有名である。

【主な編著作】純粋数学の世界(弘文堂、1942)、現代数学の基礎概念(弘文堂、1944)、数学教育(『教科内容』目黒書店、1950)、算数科(『岩波講座教育第6巻』岩波書店、1953)【参考】日本の数学100年史・下(岩波、1984)、数学教育の回顧と展望(国立教育研究所、1989)

#### ④松原元一

(数学教育学者:東京書籍 小中学校 I期~V期)

1909(明治42)年に石川県で生まれ、1933(昭和8)年東京師範学校卒業後、岡崎師範学校教諭を経て、東京文理科大学に入学し、1941(昭和16)年に東京文理科大学卒業、その後、石神井中学校(現、高等学校)教諭、東京第三師範学校教授を経て、1949(昭和24)年に東京学芸大学助教授、教授となり、1972(昭和47)年停年退官。1974(昭和49)年より白鷗女子短期大学教授となり1979(昭和54)年に退職。子どもの視点からの算数・数学教育を強調し、小中学校の教科書編集に携わっただけではなく、数学教育関係の著作者・論文は多数に上っている。数学教育史の研究でも有名である。

【主な編著作】思考の様相(近代新、1968)、「新しい算数の研究(上・下)」(近代新書、1971)、数

学的見方・考え方(国土社、1977)、考えさせる授業(東京書籍、1987)、日本数学教育史I~IV(風間書房、1982~1987)

#### ⑤古賀昇一

(数学教育学者:大阪書籍 小中学校 III期~VI期)

1911(明治44)年に京城で生まれ、広島文理科大学卒業。その後、広島高等師範学校助教諭、教諭、広島文理科大学助手、広島女子師範高等学校教授等を経て、1967(昭和41)年広島大学教授となり、昭和50(1975)年停年退官。その後、1989(平成元年)まで福山大学教授を勤め、1993(平成5)年死去。日本数学教育学会副会長、中国数学教育会会長を務め、数学教育学で多くの業績を残したが、特に、比較教育学的方法によるフランスの数学教育の研究は有名であり、その他、数学教育関係の著作者・論文は多数に上る。

【主な著作】フランスの算数教育(『数学教育学論究』、1962)、算数・数学教育におけるエンリッチメント教材の開発(明治図書、1971)【参考】日数教会誌第76巻3号

#### ⑥加藤国雄

(数学教育学者:学校図書 小中学校 III期~VI期)

1914(大正3)年に東京府で生まれ、1939(昭和14)年東京文理科大学卒業後、海軍兵学校教授、山梨師範学校教授を経て、1949(昭和24)年から山梨大学に勤務、現在は、山梨大学名誉教授。

【主な著作】数学の言語的性格(『日本数学教育学会誌』、1954)

#### ⑦宇喜多義昌

(数学者:教育出版 小中学校 III期~VI期)

1918(大正7)年に生まれ、東京物理学校を経て、1942(昭和17)年に北海道帝国大学卒業、その後、北海道立女子医学専門学校講師、北海道第一師範

学校教授, 1949(昭和24)年北海道学芸大学助教授, 教授を経て, 1964(昭和39)年に東京理科大学教授となり, 1984(昭和59)年定年退職, その後, 明星大学教授となり現在に至る。

【主な著作】実験計画法(森北出版, 1975), 多変量解析—標本分布とその応用—(明星大学出版部, 1988)

## 2) 中学校用

中学校の数学科教科書の著作者は340名であるが, 3期以上著作者となった人々64名をまとめると, 資料3-4のとおりである。

これらのうち4期以上著作者となった数人の特徴をあげると次のとおりである。

### ①佐藤良一郎

(数学教育学者: 中学校 大日本 I期~V期)

1891(明治24)年に和歌山県で生まれ, 1916(大正5)年に東京高等師範学校卒業, その後, 鹿児島県師範学校教諭, 東京高等師範学校助教諭を経て, 1929(昭和4)年に東京高等師範学校教授となる。その後, 東京教育大学教授, 千葉大学教授を経て, 千葉大学を1957(昭和32)年に定年退官。さらに, 日本大学教授, 明星大学教授を歴任, 1984(昭和59)年に明星大学を退職。数学教育者としても著名であったが, 統計学者としても著名であった。数学教育については, 戦前から多数の著書・論文を著している。戦前は, 小倉金之助らとともに数学教育改良運動で重要な役割を果たし『初等数学教育の根本的考察』(目黒書店, 1924)などを著し, 1931(昭和6)年の中学校数学科教授要目作成の中心的な役割を果たし, また, 自ら, 中学校用等の数学科教科書を著した。戦後も, 数学教育の研究・実践の中心的な役割を果たし続け, 1958(昭和33)年から1965(昭和40)年にかけては, 日本数学教育会会長を務めた。1992(平成4)年に100

歳で死去。

【主な著作関係】数学教育の発展(大日本図書, 1963), 佐藤良一郎先生白寿記念論文選集(佐藤良一郎先生白寿記念論文選集刊行委員会, 1989)

【参考】日数教会誌第74巻7号

### ②正田健次郎

(数学者: 中学校 啓林館 I期~IV期)

1902(明治35)年に群馬県で生まれ, 1925(大正14)年に東京帝国大学卒業, ドイツ留学を経て, 1933(昭和8)年大阪帝国大学教授となり, 1954(昭和29)年に大阪大学総長となり1960(昭和35)年まで勤めた。その後, 東京女子大学教授, 大阪大学学部長, 武蔵大学長等を歴任。1966(昭和44)年文化勲章を受賞。1977(昭和52)年に死去。数学者ではあるが, 数学教育にも理解をもっていた。

【主な著作】抽象代数学(岩波書店, 1932), 代数学(共著: 岩波書店, 1952), 数学への道(啓林館, 1962) 【参考】日本の数学100年史・下(岩波, 1984)

### ③田中良運

(数学教育者: 中学校 啓林館 I期~V期)

1904(明治37)年に岐阜県で生まれ, 東京高等師範学校を卒業後, 東京師範学校附属中学校教諭となる。1940(昭和15)年からの数学教育再構成運動, 1942(昭和17)年の中学校数学教授要目改正, 1943(昭和18)年からの1種検定教科書『数学 第一類・第二類』の編集で活躍した。戦後は岐阜高等学校教諭等を勤めた後, 啓林館で教科書編集に携わった。1989年に死去。

【主な著作】文字と式(啓林館), 関数とグラフ(啓林館)

### ④田島一郎

(数学者: 中学校 学校図書 II期~V期)

1912(大正元)年に富山県で生まれ、1938(昭和13)年に東京帝国大学大学院を修了し、考え方研究社講師、雑誌『高数研究』編集部員、藤原工業大学予科教員を経て、1944(昭和19)年慶応義塾大学予科教員となり、1955(昭和30)年に慶応義塾大学教授となり、1980(昭和55)年からは洗足学園魚津短期大学学長を務め、かたわら1983(昭和58)年からは日本数学教育学会会長を務めていたが、それらの任期中の1985(昭和60)年に死去。数学者ではあるが、数学教育に堪能で、特に、数学教育現代化においては『数学教育現代化の指導シリーズ』(日本数学教育学会)の執筆・出版に携わった。また、数々の教科書や参考書を著し、大学受験のラジオ講座でも活躍した。

【主な著作関係】田島一郎(田島先生「想い出の記」編集委員会、1992)【参考】日数教会誌第67巻5号

#### ⑤小川庄太郎

(数学教育学者：中学校 大阪書籍 I期-VI期)  
1920(大正9)年に奈良市で生まれ、1942(昭和17)年に東京文理科大学卒業、その後、軍務を経て、奈良師範学校助教授、教授、奈良学芸大学助教授、そして、1962(昭和37)年奈良学芸大学教授となった。1985(昭和60)年に停年退官となり、その後、近畿大学教授も勤めた。1993(平成5)年に死去。

【主な著作】数学教育現代化の課題(『奈良教育大学紀要』、1970、1972、1973)、算数教育の理論と実際(共著：聖文社、1980)【参考】日数教会誌第76巻3号

#### ⑥阿部浩一

(数学教育学者：中学校 大阪書籍 III期-VI期)  
1922(大正11)年に大阪市で生まれ、1944(昭和19)年に広島文理科大学卒業、大阪第二師範学校

を経て、1950(昭和25)年より大阪学芸大学講師、助教授、教授、1967(昭和42)年に大阪教育大学教授となり、1987(昭和62)年に定年退官。数学教育現代化、発見学習、幾何教育などで数学教育に貢献した。1993(平成5)年に死去。

【主な著作】阿部浩一教授数学教育著作集(大阪教育大学阿部浩一教授退官記念会、1987)【参考】日数教会誌第76巻9号

#### ⑦小高俊夫

(数学教育者：中学校 大日本 I期-VI期)

1925(大正14)年に千葉県で生まれ、1947(昭和22)年に東京高等師範学校卒業、その後、豊玉中学校(現、豊玉高等学校)を経て、1948(昭和23)年東京高等師範学校附属中学校・高等学校教諭、東京教育大学附属中学校・高等学校教諭、その後、1970(昭和45)年都留文科大助教授、教授、昭和51(1976)年静岡大助教授、教授、1989(平成元年)年定年退官。その後明星大学教授。

【主な編著作】算数・数学カリキュラムと授業の追究(富士教育出版社、1989)

(長崎榮三)

#### 〈参考文献〉

- 1) 海後宗臣(編纂)『日本教科書大系 近代編 第十四巻 算数(五)』講談社、1964年9月、pp.8-205.
- 2) 中村紀久二編(復刻)『文部省 調査済教科書表』芳文閣、1985年1月、238p.
- 3) 小倉金之助『数学教育史』岩波書店、1932年6月、pp.315-319.
- 4) 中村紀久二『文部省 検定済教科用図書表 解題』芳文閣、1986年1月、p.18.
- 5) 中村紀久二編(復刻)『文部省 検定済教科用図書表』芳文閣、一〜七、1985年12月.
- 6) 5)に同じ。

- 7) 職歴は、「日本の数学100年史」編集委員会編『日本の数学100年史 上』岩波書店、1983年10月、337p. 及び、松原元一『日本数学教育史』風間書房、Ⅲ、1985年12月、562p. によった。
- 8) 長崎栄三「数学第一類・第二類の検定教科書の編纂とその思想—戦時下の中学校数学教育—」『国立教育研究所研究集録』No.21, 国立教育研究所, 1990年9月, pp.43-56.
- 9) 梶山雅史『近代日本教科書史研究』メネルヴァ書房, 1998年2月, p.317.
- 10) 高木左加枝『伝統と調和に基づく算数(算術)教育の史的研究』近代新書, 1973年1月, p.50.
- 11) 森規矩男「国民学校発足のごろの教科書」『数学教育の発展』大日本図書, 1963年4月, p.284.
- 12) 長崎栄三「数学第一類・第二類の検定教科書と教科書国定化—戦時下の中学校数学教育—」『国立教育研究所研究集録』No.26, 国立教育研究所, 1993年3月, pp.53-66.
- 13) 佐藤良一郎が訂正した原本が国立教育研究所図書館にあり、宮崎勝弐が訂正した原本を筆者が所蔵している。
- 14) 各年度の文部省『教科書目録』による。



2. 戦前の数学科検定教科書の著作者と学校種別検定認可点数

著者 番号	著者名	主な職歴	検定認可点数				検定認可年
			中学	高女	実業	総計	
001	秋山武太郎	武蔵高等学校教授	2			2	大正08
002	浅越金次郎	攻玉社中学校	1			1	明治21
003	芦野敬三郎	海軍大学教授	2			2	明治30—明治31
004	阿部八代太郎	東京高等師範学校教授	13	11	14	38	大正05—昭和14
005	飯島正之助	第一高等学校教授	1			1	明治35
006	飯島正之助・天野一之丞		4			4	明治32—明治41
007	飯島正之助・三上義夫	(三上)学士院囑託	2			2	明治41
008	生駒萬治	東京高等師範学校	1	2		3	明治37—大正02
009	石野又吉・村上武次郎			2		2	大正03—大正04
010	井田継衛		1			1	明治29
011	伊藤豊十			12		12	明治38—大正05
012	稲垣作太郎	東京市立第三高等女学校		5		5	明治43—昭和02
013	稲垣作太郎・堀内順之助			2	2	4	昭和11—昭和12
014	今村明恒	陸軍幼年学校	1			1	明治36
015	岩付寅之助	広島文理科大学		6	5	11	昭和05—昭和12
016	上野清	数理書院	14			14	明治22—明治34
017	上野清・上野繁		1			1	大正05
018	上野清・奥平浪太郎		1			1	明治29
019	上野清・平井善太郎		1			1	明治29
020	上野繁	陸軍砲学校教授	1			1	昭和07
021	宇川久衛		1			1	明治37
022	遠藤利貞	東京府中学校	2			2	明治22—明治23
023	遠藤又蔵		12			12	明治33—大正07
024	遠藤政之助・星野富太郎	(遠藤)電信学校教官	1			1	明治42
025	大阿久登市				1	1	昭和11
026	大阪工業数学研究会	-----			3	3	昭和14—昭和16
027	大阪数学研究会	-----	2			2	昭和02
028	大島孝造		1			1	明治25
029	大須賀炳・近藤耕蔵			5		5	大正07—大正11
030	大森俊次	東京大学予備門	2			2	明治27—明治28
031	大森俊次・谷田部梅吉		3			3	明治21—明治22
032	岡田良知	東北帝国大学教授	5			5	昭和07—昭和14
033	岡田良知・森本清吾				1	1	昭和09
034	岡村良馬			1		1	大正04
035	越知治成				1	1	昭和09
036	小野新太郎	奈良女子高等師範学校		2		2	昭和03—昭和04
037	柿原久保		2			2	明治36—明治39
038	掛谷宗一	東京文理科大学教授	14	8	8	30	大正11—昭和13

039	梶島二郎	東京工業大学教授	7		4	11	大正12—昭和08	
040	春日今朝蔵			1		1	大正03	
041	金沢卯一・藤野了祐	(金沢)東京物理学校			1	1	昭和10	
042	樺正堇	東京実践女学校	23	9		32	明治30—大正10	
043	刈屋他人次郎	数学専修学校	1	1		2	大正07	
044	刈屋他人次郎・野原休一					2	明治36—明治37	
045	川合五三郎					3	大正02—大正04	
046	河口商次	北海道大学			6	3	9	昭和08—昭和13
047	菊地大麓	東京帝国大学教授	6	1		7	明治33—大正05	
048	菊地大麓・澤田吾一		4			4	明治26—明治38	
049	共同出版社編輯局		1			1	大正10	
050	國枝元治	東京文理科大学教授	25	9	3	37	明治37—昭和12	
051	國枝元治・後藤静香					5	明治45—大正06	
052	國枝元治・中沢伊與吉					7	昭和09—昭和16	
053	熊澤鏡之助・小林堅好		1			1	明治33	
054	隈本有尚	長崎高等商業学校長	1			1	明治32	
055	倉敷福太郎	学習院	5		1	6	大正02—昭和08	
056	黒田稔(大正12～ 伊達木)	東京高等師範学校教授	6	1		7	大正05—大正12	
057	黒田稔・北川久五郎		2	2		4	大正07—大正14	
058	工業教育振興会	-----				6	昭和09—昭和14	
059	小林堅好		1			1	明治36	
060	小林盈・稻垣作太郎	(小林)東京市立第三高女		28	1	29	明治37—昭和10	
061	近藤耕蔵			10		10	明治42—大正15	
062	近藤耕蔵・大須賀炳			5		5	大正13—昭和03	
063	近藤鷺	山口高等商業学校教授	2	3		5	大正14—昭和11	
064	坂井英太郎	東京帝国大学教授	3	3		6	明治39—大正05	
065	酒井左保		3			3	明治29—明治34	
066	坂田忠次郎		2			2	明治31—明治34	
067	坂田忠次郎・芦野敬三郎		2			2	明治30—明治33	
068	佐久間文太郎		5			5	明治28—明治32	
069	櫻井ミキ				3	3	昭和05	
070	佐藤良一郎	東京高等師範学校教授	5	4	1	10	昭和07—昭和16	
071	佐之井愿甫		4			4	明治29—明治43	
072	澤田吾一	東京高等商業学校教授	13	5		18	明治31—大正03	
073	三省堂編輯所	-----			2	2	昭和14	
074	静岡県経済統制課	-----			1	1	昭和14	
075	實吉益美		2			2	明治32	
076	實吉益美・鈴木長利		1			1	明治31	
077	柴田寛	第二高等学校教授	5			5	昭和07—昭和09	
078	白井傳三郎	東京物理学校教授	2			2	明治35—明治37	
079	神保長致		1			1	明治21	
080	数学教育刷新会	-----	5			5	昭和06—昭和07	

081	数学教授研究会	-----		2		2	明治38
082	数学教授同志会	-----	4	3		7	大正14—大正15
083	数学教授法研究会	-----			3	3	昭和09—昭和10
084	数学研究会	-----	2			2	明治42—大正08
085	数理社	-----	1			1	明治23
086	末綱怨一	東京帝国大学教授	5			5	昭和12—昭和13
087	杉浦徳次郎	東京商科大学			4	4	昭和09
088	杉村欣次郎	東京文理科大学教授	1			1	昭和10
089	鈴木長利	攻玉社中学校	2			2	明治21—明治37
090	鈴木長利・飯田與三		1			1	明治40
091	鈴木元美	女子学習院		1		1	大正02
092	角達介	広島高等師範学校教授	9	3	1	13	大正14—昭和10
093	精華房編輯部	-----	2			2	昭和12
094	関口雷三	学習院教授	4	5	3	12	大正15—昭和09
095	関口雷三・古賀軍治	(古賀)学習院教授	3			3	昭和06—昭和10
096	積善館編輯所	-----			3	3	昭和05
097	関本幸太郎		1	1		2	明治36—明治39
098	千本福隆	東京高等師範学校教授	7			7	大正02—大正08
099	曾田梅太郎	広島高等師範学校				2	昭和08
100	園正造	京都帝国大学教授	28	13	9	50	大正10—昭和14
101	大日本図書株式会社	-----	2			2	大正08
102	高木貞治	東京帝国大学教授	31	12	3	46	明治38—昭和14
103	高須鶴三郎	東北帝国大学教授	2	1	1	4	昭和05—昭和08
104	高橋幾造		1			1	大正02
105	高橋豊夫	広島高等師範学校教授	15			15	明治32—大正02
106	高橋豊夫・坂田忠次郎		1			1	明治35
107	田口貞次・江口武夫					2	昭和08
108	竹内端三	東京帝国大学教授	48	18	22	88	大正07—昭和14
109	竹中暁		8			8	昭和05—昭和10
110	竹貫登代多	攻玉社中学校	2			2	明治27
111	田中矢徳	攻玉社中学校	14			14	明治20—明治27
112	玉置哲二・飯牟礼實義・太田榮三		1			1	明治45
113	中等学校教科書株式会社	-----	3	2	2	7	昭和18—昭和19
114	中等教科研究会	-----	1			1	大正01
115	塚本文治					2	昭和08
116	津山三郎	広島高等師範学校教授	8	8	5	21	昭和03—昭和11
117	津山三郎・玉置哲二		4			4	大正15—昭和04
118	帝国書院編輯部	-----	2	10	8	20	大正12—昭和12
119	帝国通信講習会	-----	1			1	明治32
120	寺尾壽	東京帝国大学教授		2		2	大正05—大正08
121	寺尾壽・藤野了祐		20		9	29	大正11—昭和10
122	寺尾壽・吉田好九郎		30			30	明治36—大正10

123	寺尾捨次郎・有阪幾造			1		1	明治33
124	土居嘉四郎		2			2	明治31—明治33
125	東京開成館編輯所	-----	1	1		2	昭和02
126	東京高等師範学校附属中学校内数学研究会	-----	7	6		13	昭和02—昭和12
127	東京数学院	-----	2			2	明治31
128	東京中等教育数学研究会	-----	6			6	大正15—昭和07
129	東野十次郎		1			1	明治27
130	中川詮吉	東京帝国大学教授	18	18	4	40	大正07—昭和12
131	中久木信順・小出壽之太		1			1	明治25
132	長澤龜之助	専修大学	50	7		57	明治22—大正15
133	長澤龜之助・藤本曾登吉		1			1	明治32
134	長澤龜之助・宮田耀之助		7			7	明治22—大正02
135	中島宗治	松村宗治:台北大学		1		1	昭和06
136	中島宗治・大須賀炳			3		3	昭和06
137	中根鷺三郎			1		1	大正15
138	中村精男	東京帝国大学	4	3		7	昭和02—昭和03
139	仲本三二・河合五三郎			3		3	大正14—大正15
140	鍋島信太郎	東京文理科大学			3	3	昭和11—昭和16
141	成田熊太郎		1			1	明治37
142	成實清松	名古屋高等商業学校教授	1			1	昭和07
143	西川順之	東京高等師範学校	1	3		4	大正09—昭和05
144	日本大学	-----	1			1	昭和12
145	根岸福彌		2			2	明治33—明治36
146	根津千治	私立高等予備校	4	2		6	明治44—大正12
147	根津千治・林茂増		1			1	昭和05
148	農業学校長会	-----			1	1	昭和09
149	野口保與	東京高等師範学校	3			3	明治23—明治29
150	野瀬田佳稻		1			1	明治33
151	波木井九十郎	広島高等師範学校教授	8			8	大正02—大正14
152	橋本八年		2			2	明治45—大正01
153	長谷川一與・堀田要三郎			2		2	明治36
154	長谷川一與・松永孫三			1		1	明治36
155	服部一二		1			1	明治43
156	土生青		1			1	明治32
157	早川萬彌		1			1	明治33
158	林鶴一	東北帝国大学教授	54	18	14	86	明治33—昭和08
159	林鶴一・岡田良知		4	3	5	12	昭和10—昭和14
160	原田長松			3		3	明治35—明治38
161	人見忠次郎	陸軍中央幼年学校	1			1	明治31
162	廣島高等師範学校附属中学校数学研究会	-----	29	13	10	52	大正06—昭和16
163	富山房編輯所	-----	1			1	明治36
164	藤澤利喜太郎	東京大学教授	8	1		9	明治31—明治41

165	藤澤利喜太郎・飯島正之助		2		2	明治22－明治23	
166	藤野了祐	早稲田大学	1	1	2	昭和14	
167	藤森温利・樺正堇		1		1	明治32	
168	堀口平次郎・瀧澤二三雄			1	1	昭和10	
169	松岡文太郎	東京数理学館	4		4	明治27－明治45	
170	松原通男			1	1	昭和10	
171	松村定次郎	明治大学教授	1		1	大正08	
172	松村定次郎・根津千治		3		3	大正02－大正07	
173	松本敏三	京都大学	25	8	9	42	大正15－昭和16
174	真野肇・遠藤政之助		3		3	明治29－明治34	
175	真野肇・宮田耀之助		4		4	明治32－大正03	
176	間谷力		2		2	昭和06	
177	三木留三		1		1	明治34	
178	溝口鹿治郎			2	2	明治35－明治39	
179	三守守	東京高等工業学校教授	15		15	明治36－大正10	
180	宮田耀之助		1		1	明治33	
181	宮本久太郎		2		2	明治29－明治36	
182	宮本藤吉		10		10	明治36－大正04	
183	三輪桓一郎	京都帝国大学教授	11		11	明治30－大正04	
184	三輪田輪三	第六高等学校教授	1		1	明治41	
185	元田傳	東京高等師範学校教授	9	4	13	明治44－昭和04	
186	森外三郎	第三高等学校教授	2	4	6	明治26－大正15	
187	森岩太郎	東京女子高等師範学校		17	17	明治36－大正11	
188	守岳雄		1		1	明治41	
189	守屋美賀雄	北海道帝国大学教授	2		2	昭和14	
190	安川數太郎	横浜高等工業学校教授	3		3	昭和06	
191	保田棟太・白井傳三郎	(保田)第一高等学校教授	4		4	明治40－大正02	
192	谷田部梅吉	東京大学予備門教官	1		1	明治28	
193	山崎勇			1	1	明治33	
194	山下安太郎		1		1	明治31	
195	山田萬太郎		2		2	明治23－明治30	
196	山村乾十郎		1		1	明治32	
197	吉田好九郎・藤野了祐	(吉田)学習院教授	1	3	4	明治38－大正04	
198	米山國蔵	九州帝国大学教授	16	3	3	22	昭和04－昭和14
199	六盟館編輯所	-----		2	2	明治45－大正01	
200	脇坂無爲・治田耀賢		1		1	大正14	
201	和田健雄・西内貞吉		2	3	5	大正13－昭和03	
202	渡邊孫一郎	東京工業大学教授	3	10	8	21	大正12－昭和14
203	渡邊義勝・安川數太郎		1		1	大正13	

注：著者番号は、著作者名の五十音順に従って筆者が付したものの

### 3. 戦後の小学校算数科の検定教科書の主な著作者

著者名	職種	職歴	教科書会社	期	協力者
松原元一	11	東京学芸大学第三師範大泉中主事、東京学芸大学助教授、教授、名誉教授	東書	I II III IV V	
黒田孝郎	12	津田塾大学講師、北海道大学助教授、北海道大学教授、専修大学教授	東書	I II III IV V	
橋本純次	12	神戸大学助教授、神戸大学教授	啓林	I II III IV V	
加藤康順	20	お茶の水女子大学附属小学校教諭	東書	I II III IV V	
黒田忠司	21	神戸大学教育学部附属小教諭、尼崎市立武庫北小学校長、夙川学院短期大学講師	啓林	I II III IV V	
元古良太郎	21	大阪学芸大学附属小教諭、市立福島小学校教諭、市立蒲江小・立田小学校長	啓林	I II III IV V	
片桐義二郎	21	大阪学芸大学附属小教諭、大阪市立四貫島小学校教諭、北中島小学校長	啓林	I II III IV V	
金児賢治	21	東京学芸大学第三師範大泉小教諭、附属大泉小学校教諭、豊島区立白鳥小学校長	東書	I II III V VI	III V
泉並幸男	30	大阪府大阪市南明丘小学校教諭、桜宮小、南住吉小、萩之茶屋小学校教諭	啓林	I II III IV V	
前田隆一	90	大阪書籍	大書	II III IV V VI	
加藤国雄	11	山梨大学助教授、山梨大学教授、山梨大学名誉教授	学図	III IV V VI	III
古賀昇一	11	広島大学助教授、広島大学教授、広島大学名誉教授	大書	III IV V VI	
彌永昌吉	12	東京大学教授、東京大学名誉教授、学習院大学教授	東書	I II III IV	
三村征雄	12	東京大学教授兼東京文理大学教授、東京大学名誉教授学習院大学教授	東書	I II III IV	
中村幸四郎	12	大阪大学教授、関西学院大学教授	啓林	I II III IV	
藪根智顕	12	和歌山大学助教授、和歌山大学教授	啓林	I II III IV	
宇喜多義昌	12	北海道学芸大学札幌分校教授、東京理科大学教授	教出	III IV V VI	
伊藤一郎	21	東京学芸大学附属豊島小学校教諭、東京都台東区立根岸小学校長	大日	I II III V	IV
堀山欽哉	21	東京学芸大学附属大泉小学校教諭、小金井市立第二小学校長、練馬区立大泉学園小学校長	大日	II III IV V	
小林 森	21	東京学芸大学附属豊島小学校教諭、東京学芸大学附属小金井小学校、練馬区立豊玉小学校長	大日	III IV V VI	IV
黒松喜代秀	22	大阪学芸大学附属小学校教諭、大阪成蹊女子短期大学助教授・教授	大書	I II V VI	V
岡村秀夫	30	神奈川県横浜市南太田小学校教諭、横浜市立西前小学校長	二葉・教出	I II IV V	
安田良一	40	学習院初等科教諭	学図	I III IV V	
上林弥四郎	11	浪速大学助教授、大阪府立大学助教授	啓林	I II III	
原 弘道	11	横浜国立大学助教授、横浜国立大学教授	二葉・教出	I II IV	III
戸田 清	11	広島大学教授、広島大学名誉教授	学図	II III IV	
荒木雄喜	11	熊本大学教授、熊本大学名誉教授	東書	III IV V	
斎藤廉治	11	静岡大学助教授、静岡大学教授	学図	III IV V	
田盛秀登	11	広島大学助教授、広島大学教授、広島大学名誉教授	学図	III IV V	
中野 昇	11	広島大学教授、広島大学名誉教授	学図	III IV V	
川口 廷	11	東京学芸大学教授、東京学芸大学名誉教授	学図	IV V VI	IV
植松茂暢	11	香川大学教授、香川大学名誉教授	教出	IV V VI	
岩合一男	11	高知大学助教授、高知大学教授、広島大学教授	大書	IV V VI	
畦森宣信	11	福岡教育大学助教授、福岡教育大学教授	大書	IV V VI	
出石 隆	11	福岡教育大学助教授、福岡教育大学教授、福岡教育大学名誉教授	大書	IV V VI	
小川庄太郎	11	奈良教育大学教授、奈良教育大学名誉教授	大書	IV V VI	
平林一栄	11	広島大学助教授、広島大学教授	大書	IV V VI	V
阿部浩一	11	大阪教育大学教授、大阪教育大学名誉教授	大書	IV V VI	
石原正也	11	岐阜大学教授、岐阜大学名誉教授	大日	IV V VI	
末綱恕一	12	東京大学教授、統計数理研究所長	大日	I II III	
菅原正巳	12	統計数理研究所	大日	I II III	
梅沢敏夫	12	群馬大学学芸学部教授、埼玉大学教授	教出	III IV V	
河口商次	12	日本大学大学院教授、北海道大学理学部教授、北海道大学名誉教授、相模工業大学教授	教出	III IV V	

古屋 茂	12	東京大学教授、東大名誉教授・青山学院大教授	東書	IV V VI	
小平邦彦	12	東京大学教授、東京大名誉教授・学習院大教授	東書	IV V VI	
高橋睦男	12	大阪教育大学教授、大阪教育大学学長	大書	IV V VI	
赤 摂也	12	立教大学教授	大日	IV V VI	
上田京子	20	東京学芸大学附属竹早小学校教諭	大日	I II III	
北山 巽	20	東京教育大学付属小学校、学校教育研究所所員	学図	III IV V	II
正木孝昌	20	東京教育大学付属小学校教諭、筑波大学付属小学校教諭	学図	IV V VI	
滝 富夫	20	東京教育大学付属小学校教諭、筑波大学付属小学校教諭	学図	IV V VI	VI
北原禱武	21	東京学芸大学附属豊島小学校、品川区立芳水小学校教諭	大日	I II III	II
花村郁雄	21	東京学芸大学付属世田谷小教諭、東京都世田谷区立等々力小学校長	二葉・教出	I II IV	IV
大島富明	21	東京学芸大学附属追分小学校、板橋区立常盤台小学校長	大日	II IV V	
細呂木見良	21	奈良女子大付属小学校教諭、大阪市立南大江小学校長、大阪教育大学講師	大書	II V VI	
三石 仁	30	東京都荒川区立瑞光小学校教諭	大日	I II III	
杉山政衛	30	東京都台東区立田中小学校、文京区立鷗之小学校教諭	大日	I II III	III
根本力雄	30	東京都教育委員会教育指導員、世田谷区立経堂小学校長	二葉・教出	I II IV	
石田貞一	30	東京都豊島区立長崎小学校校長、柳町小学校教諭	二葉・大日	I II IV	
尾崎馨太郎	30	埼玉県指導主事、大宮市立桜木小学校長	東書	II III IV	II
高森敏夫	30	東京都練馬区立中村小学校教諭、港区立白金小学校長	東書	II IV V	II III
大塚茂雄	30	東京都北区立滝野川第二小教諭、北区立十条台小学校教諭、北区立王子第三小学校長	東書	III IV V	
明石準一	30	東京都港区立青南小学校教諭、港区立白金小学校教諭・校長	東書	IV V VI	
竹内嗣郎	31	東京都新宿区立淀橋第四小教諭、新宿区立津久戸小学校教諭、聖徳大学付属小学校教諭	啓林	IV V VI	
宮城延太郎	32	滋賀県大津市教育研究所、大津市立中央小学校長、教育総合研究所所員	大書	II V VI	
藤原安治郎	40	成蹊学園教諭	啓林	I II III	
福田正一郎	40	学習院初等科教諭	二葉・教出	I II IV	
林 佐一	40	慶応義塾教諭、慶応義塾幼稚舎、慶応義塾幼稚舎舎長	学図	I III IV	III
新舟 清	40	成蹊小学校教諭	東書	IV V VI	
中山 理	40	慶応義塾幼稚舎教諭	学図	IV V VI	
日下部 山	40	成城学園小学校教諭、成城学園初等学校教諭	学図	IV V VI	
香取良範	51	成蹊学園教諭、前成蹊中学校教諭	東書	II III IV	
織田富勝	60	東京都立城南高等学校教諭	東書	I II III	
塩野直道	90	啓林館	啓林	II III IV	

注：

職種 11 大学・数学教育学 12 大学・数学 13 大学・教育学

20 付属小 21 付属小→公立小 22 付属小→大学

30 公立小 31 公立小→私立小 32 公立小→研究所

40 私立小 50 公立中 51 私立中 60 公立高 90 その他

期 I 期：1950(昭和25)年～ II 期：1955(昭和30)年～ III 期：1961(昭和36)年～

IV 期：1971(昭和46)年～ V 期：1980(昭和55)年～ VI 期：1992(平成4)年～

協力者の時期：学習指導要領の改訂期を教科書の発行時期に合わせた。

4. 戦後の中学校数学科の検定教科書の主な著作者

著者名	職種	職	歴	教科書会社	期	協力者
小川庄太郎	11	奈良学芸大学助教授、奈良教育大学教授、奈良教育大学名誉教授		大書	I II III IV V VI	
小高俊夫	21	東京教育大学附属中学校・高等学校教員、都留文科大学助教授、静岡大学教授、明星大学教授		大日	I II III IV V VI	
仲田紀夫	21	東京教育大学附属中・高校教員、東京大学教育学部附属中学校・高等学校教員、埼玉大学教授		大日・学図	I II III IV V VI	
松原元一	11	東京学芸大学助教授、東京学芸大学教授、東京学芸大学名誉教授		東書	I II III IV V	IV
佐藤良一郎	11	東京教育大学教授、千葉大学教育学部教授、日本大学教授、明星大学教授		大日	I II III IV V	III
岩村 聡	12	お茶の水女子大学助教授、東京教育大学教授、立教大学教授		東書	I II III IV V	
黒田孝郎	12	津田塾大学講師、北海道大学助教授、専修大学教授		東書	I II III IV V	
橋本純次	12	神戸大学助教授、神戸大学教授		大書・啓林	I II III IV V	
高橋睦男	12	大阪学芸大学教授、大阪教育大学学長		大書	II III IV V VI	
熊沢 淡	20	東京教育大学附属中学校、附属高等学校教員、筑波大学附属中・高等学校		大日	I II III IV V	IV V
井上義夫	21	東京教育大学附属中学校、附属高等学校教員、立正大学講師、文教大学教授、元文教大学教授		大日	I II IV V VI	III
宮崎勝次	21	東京教育大学附属中学校、附属高等学校教員、琉球大学教授、東京女子体育大学教授		大日	I II III IV V	II III
佐々木元太郎	21	東京教育大学附属中学校、附属高等学校教員、滋賀大学教授		大日	I II III IV V	
松岡元久	21	東京教育大学附属中学校、附属高等学校教員、山形大学助教授、山形大学教授		大日・大書・学図	I II III IV V	II
島津義雄	30	滋賀県犬上郡豊日中学校教諭、近江町立双葉中学校教諭、彦根市立西中学校教諭		大書・啓林	I II III IV V	
乾 東一	62	大阪府立清水谷高等学校教諭、大阪府立東豊中高等学校教諭		啓林	I II III IV V	
田中良運	62	東京高師付属中学校教諭、岐阜市立長良高等学校教諭、岐阜県立岐阜高等学校教諭		啓林	I II III IV V	
内藤美城男	62	奈良女高師付属中学校教諭、鳥取県立松江高等学校教諭		啓林	I II III IV V	
前田隆一	90	大阪書籍		大書	II III IV V VI	
阿部浩一	11	大阪学芸大学助教授、大阪教育大学教授、大阪教育大学名誉教授		大書	III IV V VI	
古賀昇一	11	広島大学助教授、広島大学教授、広島大学名誉教授		大書	III IV V VI	
加藤国雄	11	山梨大学助教授、山梨大学教授、山梨大学名誉教授		学図	III IV V VI	
中村幸四郎	12	大阪大学教授、関西学院大学教授、大阪大学名誉教授		大書・啓林	I II III IV	
彌永昌吉	12	東京大学教授、東京大学名誉教授・学芸院大学教授		東書	I II III IV	
三村征雄	12	東京大学教授、東京文理大学教授、東京大学名誉教授・学芸院大学教授		東書	I II III IV	
正田建次郎	12	大阪大学理学部長、大阪大学総長、武蔵大学学長		啓林	I II III IV	
坂本行雄	12	日本女子大学講師、日本女子大学助教授、日本女子大学教授、成蹊大学教授		東書	II III IV V	
田島一郎	12	慶応義塾大学教授、慶応義塾大学名誉教授		学図	II III IV V	
三輪辰郎	64	東京教育大学付属高校教諭、大阪教育大学助教授、大阪教育大学教授、筑波大学教授		啓林	III IV V VI	V VI
曾田梅太郎	11	南山大学教授、岡崎大学教授		学図	I III IV	
原 弘道	11	横浜国立大学助教授、横浜国立大学教授、相模工業大学教授		二葉・教出	I III IV	III IV
戸田 清	11	広島大学教授、広島大学名誉教授		学図	II III IV	
斎藤廉治	11	静岡大学助教授、静岡大学教授		学図	III IV V	
中野 昇	11	広島大学教授、広島大学名誉教授		学図	III IV V	IV
荒木雄喜	11	熊本大学教授、熊本大学名誉教授		東書	III IV V	
川口 廷	11	東京学芸大学教授、東京学芸大学名誉教授		学図	IV V VI	II III
植松茂暢	11	香川大学教授、香川大学名誉教授		教出	IV V VI	
岩合一男	11	高知大学助教授、高知大学教授、広島大学名誉教授		大書	IV V VI	VI
出石 隆	11	福岡教育大学教授、福岡教育大学名誉教授		大書	IV V VI	
畦森宣信	11	福岡教育大学助教授、福岡教育大学教授		大書	IV V VI	
石原正也	11	岐阜大学教授、岐阜大学名誉教授		大日	IV V VI	
宮田正彦	12	秋田大学教授		教出	III IV V	
一松 信	12	京都大学教授、京都大学名誉教授東京電機大学教授		学図	IV V VI	
宇喜多義昌	12	東京理科大学教授		教出	IV V VI	
赤 撰也	12	立教大学教授		大日	IV V VI	
前原昭二	12	東京教育大学教授、筑波大学教授、筑波大学名誉教授・放送大学教授、東京工業大学名誉教授		東書	IV V VI	

藤田 宏	12	東京大学教授、東京大学名誉教授、明治大学教授	東書	IV V VI	
小平邦彦	12	東京大学教授、東京大学名誉教授・学習院大学教授	東書	IV V VI	
永井啓子	20	お茶の水女子大学附属中学校教諭、お茶の水女子大学附属中副校長	学図	IV V VI	V
久米成夫	21	東京教育大学附属中学校、附属高等学校教官、東京学芸大学助教授	大日	III V VI	
岡田樟雄	21	広島大学附属中学校教諭、広島大学助教授、広島大学名誉教授	学図	IV V VI	
小関照純	21	東京学芸大学附属世田谷中教諭、群馬大学教授	啓林	IV V VI	
岡本光司	21	東京教育大学附属中学校、附属高等学校教官、東京学芸大学附属竹早中学校、静岡大学教授	大日	IV V VI	
久保田 滋	30	東京都品川区立荏原第四中教諭、目黒第十中学校教諭	二葉・学図	II IV V	
岩木敬二郎	30	東京都中央区久松中教諭、文京区立第五中教諭、板橋区立中台中学校長	大書	III V VI	IV
鳥居雄爾	30	東京都渋谷区立本町中学校教諭、杉並区立富士見丘中学校教諭、杉並区立宮前中学校教諭	教出	IV V VI	V
井出 昭	30	東京都国分寺市立第二中学校教諭、武蔵野市立第一中学校教諭	東書	IV V VI	
吉村 啓	40	慶応義塾普通部教諭、慶応義塾大学教職センター講師	学図	IV V VI	
吉中外喜	40	慶応義塾中等部教諭	学図	IV V VI	
浅沼正明	62	東京都立城南高等学校教諭	東書	I II III	
織田富勝	62	東京都立城南高等学校教諭	東書	I II III	
松宮清治	62	東京都立大崎高等学校教諭、東京都立白鷺高等学校教諭	東書	IV V VI	
松田道雄	64	成蹊高等学校教諭、成蹊大学教授	東書	II III IV	II
塩野直道	90	啓林館	啓林	I II III	

注：

職種 11 大学・数学教育学 12 大学・数学 13 大学・教育学  
20 附属中 21 附属中→大学 30 公立中 31 公立中→附属中 32 公立中→私立中  
40 私立中 50 公立小 61 附属高 62 公立高 63 私立高 64 高校→大学  
90 その他 99 不明  
期 I 期：1951(昭和26)年～ II 期：1956(昭和31)年～ III 期：1962(昭和37)年～  
IV 期：1972(昭和47)年～ V 期：1981(昭和56)年～ VI 期：1993(平成 5)年～  
協力者の時期：学習指導要領の改訂期を教科書の発行時期に合わせた。

(作成 長崎榮三)